

Y2-35

看護師間の関係性から看護の質向上を考える

芳賀赤十字病院
○柳沢 由美

【はじめに】医療の質の向上に対する社会的要請が高まるなか、看護師は鍵を握る存在となりうる。看護者の倫理綱領（日本看護協会、2003）では「看護者は、より質の高い看護を行うために、看護者自身の心身の健康の保持増進に努める」とあるが、個人の努力以上に職場環境がサポートティブであることが重要なのではないかと考えた。

【方法】看護師8名を対象に面接法を行った。看護師間の関係性に着目したところ明確となった課題を踏まえ、今後の取り組みについて報告する。

【結果・考察】対象者の語りの中で看護師間の関係性に着目し、意味内容を分析した結果『褒めない文化』、『フィードバックの希薄さ』、『関係維持のために装う無関心』が抽出された。対象者は、看護師間の関係性を「褒めない文化」、「否定から入る世界」と表現し、その状況が当たり前であるかのように語った。また看護実践に関して「評価をくれるのは患者だけ」と語り、患者からの反応を様々な形で求めている。さらに、他の看護師の行為や病棟内の習慣について、関係性を重視するあまり、違和感を感じても表出が出来ないと語った。これらの結果は、看護チームとしての有りよう個人へのサポートに大きな課題を提供してくれた。何名かの対象者は「インタビューを受けるうちに、違う視点で自分をみることができ、スタッフに助けを求めることが怖くなくなった」と語った。これは、いかに自分の思いを他者に吐露することが重要であることを示しており、このような機会と場を設ける必要性を感じた。

【今後の課題と取り組み】アサーティブコミュニケーション能力の向上と、チーム内で能力を発揮できる教育が必要であろう。また、思いを吐露する場と機会の提供として、今年度より週に1度のメンタル相談を開始した。今後効果についてはプロスペクティブ調査の報告を行う予定である。

Y2-36

助産ケアの質向上を目指して～助産師外来開設前後の質評価を比較して～

前橋赤十字病院 産婦人科病棟
○木村 有子、山口 絵理、田村 教江

【目的】助産師の専門能力を主体的に発揮し、自立した助産ケアを行うために助産師外来を開設し6ヶ月が経過した。助産師外来開設前後で日本看護協会助産師職能委員会の「医療機関における助産ケアの質評価」を比較し、質の高いケアの提供につながっているか明らかにする。

【方法】1. 研究対象：A病院産婦人科病棟勤務助産師17名。研究の主旨、匿名の確保、研究協力への自由意志の尊重について説明し、同意を得た。

2. 「医療機関における助産ケアの質評価」を日本赤十字社看護部方針に基づいた「前橋赤十字病院キャリア開発ラダー」レベル別に比較した。

3. 助産師外来開設6ヶ月前と開設後6ヶ月を比較した。

【結果・考察】「ケアリング」は対象者を知ることや共にいることで助産師の姿勢を評価する。ラダー1はレベル2、ラダー2はレベル3、ラダー3はレベル4の評価が多かったが、開設後は、全てにおいて評価が上がった。

「妊娠期の診断とケア」では母体・胎児の健康診査や提供したケアの評価、妊産婦のニーズの把握など実際のケアを評価する。ラダー1は該当なし、ラダー2はレベル3が多く、ラダー3はレベル4の評価もあり、ケアの実践に対する評価のためラダー別に大きく差があった。開設後もラダー別に差はあるものの全体の評価は上がった。

開設前、全体的に評価の高いラダー3でも「胎児の健康診査」「パースプランの把握」「指導内容の評価」が低かったため、開設にむけて教育を企画・実施し、健診パスや指導マニュアルを作成、産前教育も見直して参加型に変更した。その結果、超音波技術を習得し、助産診断をしながら保健指導をすることで、助産師外来開設後は、全ての項目において自己評価が上がったと考える。